

地域情報のデータベース化
- 島根ハイパー風土記研究会の試み -

富岡 建
富士興業・コンピュータセクション『ロードス』

コンピュータを利用し、地域地域に密着している伝統、伝承文化などをデータベース化し、後世に伝える運動を国民的運動として展開することを提案する。もって、国民一般のコンピュータ利用技術を向上させ、また、地域発信型の情報ネットワークの確立を模索する。

その具現化の試みとして、① 通産省の「ハイパー風土記」の提唱、② 東京都文京区教育委員会の「ふるさと歴史博物館」でのコンピュータ利用例、③ 島根ハイパー風土記研究会の出雲神話のハイビジョンによるデータベース化、について検討、報告する。

AN IMPROVING REGIONAL INFORMATIONS
BY CONSTRUCTING THE DATA-BASE

ONE OF CHALLENGES
BY SHIMANE HYPER 'FUDO-KI' STUDY GROUP

Ken Tomioka
Fuji-kogyo Co.,ltd. Computers' Section "RHODUS"

333 Tsuda-machi, Matsue City, Shimane pref. 690, Japan

I would like to suggest we start a national movement to hand down regional traditions, cultures, and so on through data-base using computers.

We should try to improve people's skill ('literacy') in using computers and establish region-oriented information networks through above this movement.

As a trial of materialization, I studied and report on:

- ① Recommendation on Hyper "FUDO-KI" by the Ministry of International Trade and Industry
- ② Cases of using computers at "FURUSATO (=hometown) " Historical Musium by the Board of Education of Bunkyo-ku, Tokyo
- ③ Making data-base of Izumo myths by Shimane Hyper "FUDO-KI" Study Group through "high vision"

1. まえがき

古来、吾が出雲地方は「神話の国」といわれてきた。確かに、出雲地方には出雲大社を筆頭にして、神話に息づく歴史的遺産が数々残されている。そして、他府県、海外からの来訪者は、この出雲地方へ旅すると、人類の歴史の重みを感じるという。

ところで、我々出雲地方で生まれ育ち、しかも戦後教育を受けてきた者にとっては、「神話の国」ということばにある種の嫌悪感を感じてきた。なぜ、他地方に向けて何か事業展開をおこなうとき、出雲の前に「神話の国」ということばを枕詞として使うのか。なぜ、島根国体は「くにびき国体」でなければならなかったのか。

「神話の国」ということばを枕詞として使うことにより、現在という「とき」に生きることを放棄しているのではないか。古代文明の繁栄を隠れ蓑に、現代文明では中央に比べかなり遅れた地方であることを隠蔽しようとしているのではないか。そうした穿った気持ちをもっていた。

しかし、戦後生まれの我々も歳をとってきたのか、ふと周囲の若年層に聞いてみると、青少年はこの生まれ育った出雲地方の歴史をまるで知らない。ましてや、出雲神話は風化しつつあるといっても過言ではない。我々には、嫌というほど繰り返され聞かされた出雲神話が、である。

出雲地方に生まれ育った者として、出雲地方の歴史、出雲神話にみられる古代出雲人の考え方などを、後世に伝えていくことは、重要なことと最近考えるに至った。これが、今回の出発点とする問題意識である。具体的には、現代版の「出雲風土記」をコンピュータを利用し、どう構築していくべきか。以下、仲間と研究してきた内容などを報告します。

2. ハイパー風土記委員会

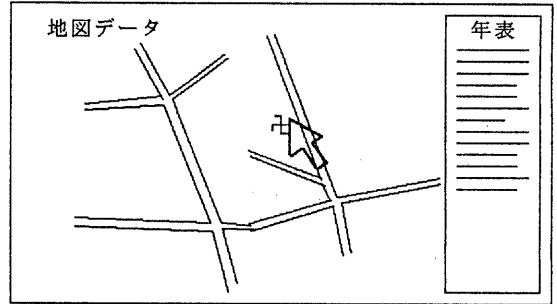
平成2年から3年にかけて、通産省機械情報産業局新映像産業室のバックアップのもとに「ハイパー風土記委員会」が発足、我々も縁あって参加の機会を得た。

この委員会でのメインテーマは、技術革新が進むニューメディアを使って、新しい国民参加型の文化創造運動がおこせないか、ということであった。

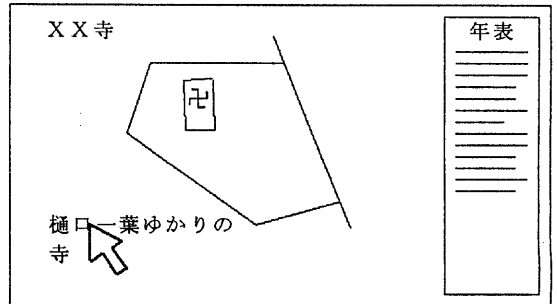
何回か研究会を続け、「ハイパー風土記」のプロトタイプを具現化するにいたった。

このプロトタイプの大筋は以下の通り。

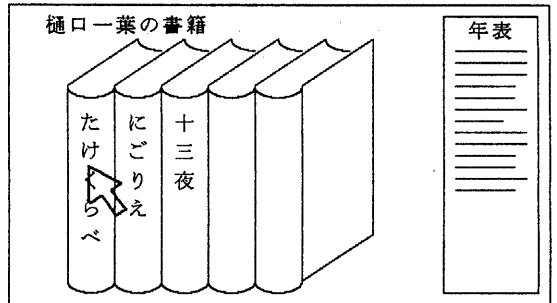
- ① コンピュータの画面上に地図データを表示。



- ② 地図データのあるポイントをマウスで指示すると、たとえば寺の拡大図に移る。

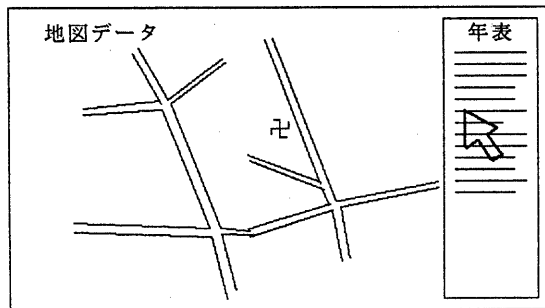


- ③ 寺の拡大図のあるポイント、あるいは文字列を指示すると、関連するデータの表示となる。



④ たとえば、ある文献を指示すると、更に階層的に選択画面に進み、文献の朗読をスピーカーを通しておこなう。

⑤ 地図データからの選択だけでなく、年表からも階層的にあるデータへのアクセスができるようにする。



この委員会で技術的な詰めが要求されたのは、つぎのような点であった。

- ① 地図データを容易に南北、東西にスクロールさせることはできないか。
- ② 地図データの一部を拡大、縮小できないか。
- ③ 地図データに鳥瞰図を採用できないか。
- ④ 年表などの原資料として何を使うか。
- ⑤ 書棚とかの階層選択部分の部品などについては、参加する国民だれも容易に作成できるようにエディタも同時に用意できないか。

さらに論議されたのは、地図データの任意の部分を新たに選択できるポイントに設定、このポイントに対して町内会レベルのデータも入力するようにはできないか、ということであった。この場合、ある主観にもとづくデータが入力されたとき、保存する、しないの判断はだれがおこなうのか。また、歴史の偽造がおこなわれた場合、だれがチェックをおこなうのか。データの保守についても様々に論議された。

いずれにしても、この市町村レベルの「現代版風土記データ」をネットワークで結び、全国どこからでも、現在、過去を問わず地域情報が得られること

をめざそう、という意見の一致をみて、同委員会は一応解散となった。

3. 文京ふるさと歴史館のコンピュータシステム

東京都の文京区教育委員会の施設として、平成3年春、「文京ふるさと歴史館」（東京都文京区本郷4-9-29）がオープンした。このコンピュータシステムが、「ハイパー風土記委員会」の提唱を先駆ける形で「ハイパー風土記」のミニチュア版を実現している。

元々文京区教育委員会が進めてきたもので、結果的に「ハイパー風土記委員会」の提唱を受けた形のシステムとなったといえる。当館長が委員会のメンバーとなられたことから、我々の知ることとなった。アメリカのアップル社のパソコン、マッキントッシュを使い、文京区の主に文学に関する文化財の探索システムとして現在公開されている。システムの開発はパイオニアの子会社がおこなったようだ。

このシステムの主な流れを以下に示す。

- ① 画面に文京区の地図が広がる。
- ② 地図上のアクセスポイント（たとえば、歴史館、観潮楼など）を指示する。
- ③ たとえば、観潮楼を指示すると、観潮楼全体の見取図の表示となる。
- ④ たとえば、観潮楼の書斎を指示すると、この住人であった森鷗外が使っていた頃の書斎がコンピュータグラフィックスで表示される。
- ⑤ 書斎のグラフィックスから、机を指示すると、机の上のグラフィックスに切り替わり、硯、筆、原稿用紙などが表示される。
- ⑥ たとえば、原稿用紙を指示すると、別に用意されているビデオが動きだし、コンピュータ用ディスプレイと別にあるテレビ用ディスプレイの画面に鷗外直筆の原稿用紙が映し出される。
- ⑦ 書斎全体のグラフィックスに戻って、書斎の

窓をアクセスすると、ビデオが動きだし、観潮楼から見える町並みの映像がナレーションつきで映し出される。

ここで、夏目漱石と森鷗外との関係なども分かってくる。

⑧ 再び、書齋全体のグラフィックスに戻って、本棚をアクセス。本棚が大きくグラフィック表示され、森鷗外の著作書が並ぶ。

⑨ たとえば、『高瀬川』の書を指示すると、再びビデオが動きだし、『高瀬川』に関連する映像がテレビ用ディスプレイに映し出される。

⑩ このようなデータへのアプローチは、最初の地図上のアクセスポイントの歴史館からもでき、歴史館の方からはコンピュータグラフィックスのエレベーターで2階に移動すると、森鷗外、夏目漱石、坪内逍遙、樋口一葉など文京区にゆかりの文筆家の書齋が続く。

森鷗外の書齋を指示すると、それはすなわち観潮楼の書齋となる。

非常によくできたシステムである。

今のところ、森鷗外に関するデータが中心に蓄積されているというが、夏目漱石、坪内逍遙、樋口一葉などに拡大されていくことを楽しみにしたい。

なお、蛇足ながら、森鷗外に特化した場合、鷗外は吾が島根の出身者である。津和野町教育委員会などと連動したシステムへと拡張することはできないものであろうか。

4. 島根ハイパー風土記研究会の試み

「ハイパー風土記委員会」の提唱を受けて、というわけでは決してないが、吾が島根でも「島根ハイパー風土記研究会」を組織することとなった。第1回目の研究会を平成2年10月に松江市で開催した。

この研究会の開催を10月にこだわったのだが、10月を他の地方では「神無月」というのに対して、出雲では「神在月」といい、全国の神々が出雲地方に集まれる月という神話に基づいたからである。

我々の取り組みは、「出雲風土記を元に映像データとして蓄積し、学術や観光に利用できないか」ということで、映像を中心にし、コンピュータ利用は2義的に考えることでスタートした。したがって、最初は「神話ハイビジョン・マルチメディア研究会」の名前で発足することとなった。

ハイビジョンの撮影を将来の仕事と考える三代氏、地域開発の仕事をおこなっている山下プランニングルーム（松江市）の山下氏、山陰ケーブルビジョンの高橋氏、地元の写真家の古川氏、坪倉氏、神話研究家の土江氏、それにコンピュータ関係ということになって筆者が出席した。また、この会の発足には島根県総務部、出雲大社、それに通産省新映像産業室が協力していただくことになった。

最初の研究会の結果、まず出雲大社の神事、出雲風土記にまつわる行事、そして出雲神楽などを映像データとして記録して残そうということになった。それも、ハイビジョンの映像として記録することにした。ただし、ハイビジョンのカメラを借りることは費用的に無理であり、とりあえず35mmフィルムの写真で撮り、それをハイビジョンのテープに編集し直すことにした。

研究会の発足と同時に撮影を開始。幸に、ハイビジョンへの編集について、電通（東京都）が快く協力いただくことになった。更に、かねてより交渉中であった島根県主催の「ニューヨーク島根文化展」への出展も決まり、制作に弾みがついた。

こうして、出雲神話をテーマにしたものと、出雲神楽をテーマにしたハイビジョン・ソフトを完成、平成3年6月に海をこえたニューヨークでお披露目をおこなった。

このハイビジョン・フィルム制作に関して、反省点を列挙する。

① せっかくの高品位映像を制作しながらも、費用的な面で、写真からの焼き直しとならざるをえなかったこと。ために、静止画のハイビジョン・ソフトとなったこと。

② 静止画であることをカバーすべく音響効果を検討したが、迫力をもつほどのカバーできたか

どうか疑問であること。

- ③ 制作したフィルムも、ハイビジョン・ディスクプレイの普及率が低いため、公開のチャンスにめぐまれないこと。
- ④ せっかく制作した映像データを、現段階では費用的な面で、コンピュータ側での利用が難しいこと。

以上のような課題を残すこととはなったが、いずれにしてもこのような地域データ、特に時代に埋没しそうなデータを日々整理し、残していく努力は今後も続けなくてはならないと感じた次第である。

5. まとめ

吾が出雲地方に限らず、全国各地でも地域独特の伝統、伝承文化は時代の流れに押し潰され、ともすると消え去る運命をたどっているように思われる。

情報は東京発の一方通行で、地方からの情報は乏しい。新しい歴史も東京で作られ、地方はニュースの受け手でしかない今日。

しかしながら、逆に我々地方人は情報の地方発を真剣に取り組んできたであろうか。情報を受身で待つことで甘んじていたのではなかろうか。

通産省は、最近「情報リテラシーの涵養」ということばを使い、パソコンの国民的普及を計画している。また、パソコンもニューメディアも少しずつではあるが、国民ひとり一人に近づいてきた。

今なら、国民ひとり一人を、情報の受け手ではなくて、情報の発信者に変革できる環境はできたといえるのではないだろうか。

こうした意味から考えると、「新しい国民参加型の文化創造運動がおこす」という「ハイパー風土記」というコンセプトはきわめて有効であるように思う。

つぎに、この「ハイパー風土記」を国民的運動とする場合の問題点を列挙する。

- ① 国民ひとり一人が入力できるデータベースを作ることになるので、コンピュータのキーボードに対するアレルギーをなくす必要があること。

- ② 保存すべきデータかどうかを判断する公正な機関の設立が重要であること。

- ③ 地域地域で閉鎖的な運用がされるのではなくて、全国津々浦々をネットワークで結び、データのやりとりが開放的におこなわれる必要があること。

- ④ ハイビジョンなどのニューメディア機器と、コンピュータとの接続について、技術的な問題だけでなく、コスト的な問題などの詰めが必要であること。

- ⑤ 年表など基礎データ構築には、学術経験者など有識者による研究が必要であること。

- ⑥ データの管理方法など、技術的な統一が不可欠であること。

- ⑦ なによりも国民的な運動にするためには、費用の捻出が「要」であること。

しかし、地域活性化と、きたるべき21世紀に向けての国民的課題を模索する意味で、「現代版風土記」である「ハイパー風土記」の構築はやりがいのある課題であるように思われる。